

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
2【かかわる】	⑨【仲間や地域とのつながり】 幼児や高齢の人々・障がいのある人々等と一緒に生活している地域社会において、互いに支え合う仲間の大切さや地域に方々のありがたさを実感する。	教科(社会)

【単元名】

4年社会科 「安全なくらしとまちづくり」【火事を防ぎ 地震・津波にそなえる】

【対象】

4年生

【実践の概要】

◇本単元で目指す子どもの姿

火事や地震・津波から地域を守る取り組みや関係機関や地域の協力、連携について思考・判断・表現し、ふるさと・宮古市に理解と愛情をもてる子ども

◇単元について

本単元ではまず、防火を扱う。消防署見学を機に防火や消火にかかわる様々な工夫や努力について考えとともに、関係機関との連携、消防団の方々の献身的な仕事について考えを深めていく。後半では、津波の歴史を調べることを機に、津波に対する宮古市の備えについて考える。普段当たり前と思っている備えも、関係機関が連携しながら計画的、継続的に行われていることに気付かせ、地域の人と人とのつながりの大切について考えていきたい。また、学習を通じて、ふるさと・宮古市に対する理解と愛情を高めたい。

◇本時の評価規準（思考・判断・表現）

市の津波避難訓練参加者の減少の理由を「意識の希薄化、時間不足」の2点でとらえ、その問題点を自分の問題として考えている。

【授業の展開】

1. 津波避難訓練への参加人数の推移のグラフから問いをもたせ、課題設定につなげる。

津波避難訓練への参加人数は、震災後2年後からどうなっていると思いますか。



平成 21～26 年の津波避難訓練参加人数のグラフ



震災前の参加人数 2000 人は多いのか、少ないのか。

- ・なぜ震災後は3月11日に実施しているのか？
- ・震災の翌年の参加人数はなぜ増えているのか？
- ・翌年以降の参加人数はどうなっているのか？⇒減っている（事実①）

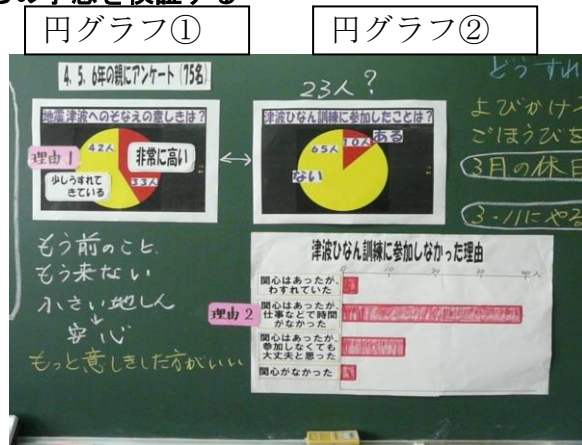
資料提示から「え～！」という子ども達のつぶやきを拾いながら、課題につなげる。

課題 津波ひなん訓練の参加者は、なぜへってきているのだろう。

2. 課題に対する予想をもつ

3. アンケートの結果（保護者）から、自分たちの予想を検証する

- ・円グラフ①から津波への意識が薄れていること（事実②）を押さえ、参加者減少の事実①と関連づける。
- ・事実②について考えを交流する。



4. 津波避難訓練未経験者の不参加理由を予想し、もう一つの理由に気付く。

- ・「関心はあるが、仕事などで参加できない」という現実的な問題（事実③）に気付かせる。

↓
訓練実施日は3月11日の実施と、土日実施のどちらがよいのだろう。

- ・3.11 実施派（18名）と土日実施派（1名）による討論となったが、最終的に3.11 実施派に変わった。

5. 宮古市役所危機管理課の方のVTRを視聴し訓練にかかわる方の願いにふれる。



6. 本時の学習のまとめとふりかえり

☆児童の自分の考えの記述

- ・子どもでも手伝えることがあれば手伝いたい。
- ・仕事より自分の命を守る訓練に行かないのか。休日にやってもドライブとか・・・どうしたらいいのか。
- ・休日にやるのもいいけど、3月11日にやるのが大切。自分の命は自分で守りたい。
- ・もっと意識した方がいい。私の家も忘れてるから気をつけたい。

成果と課題

- 地域の津波避難訓練について、時間をかけて教材開発をし、深い教材研究により、質の高い授業を展開することができた。→復興教育を通じた思考力・判断力・表現力の育成
- 子どもたちが資料を見て思わず「えー」と言ってしまうなど、資料提示の仕方が工夫されていた。
- 評価規準が具体的に示され、課題に対するまとめとなる2つの理由を3名以外全員記述することができ、学習内容をしっかり理解し表現することができた。
- 社会参画意識を高める内容であった。
- ▲意識の希薄化についてももう少し深めたかった。
- ▲内容の精選（40分授業プランでふりかえりの時間の確保）

【4年の社会科の広がり】

4年生の社会科では、この後「昔から今・未来へと続くまちづくり」として、閉伊街道と復興道路について教材化し実践した。地域の発展に尽くした先人牧庵鞭牛をとりあげ、閉伊街道・106号線・復興道路と、今も昔も、そして未来にむけても、地域の人を守るための「道」が繋がっていることを学ぶ中で、地域に対する理解と愛情をもてるように学習した。



復興道路の特徴を調べ、その建設目的を鞭牛の道づくりと関連づけて考える授業。



単元の発展として、学習発表会で「命の道・牧庵鞭牛物語」を感動的に演ずる4年生。